

ゐるのである。以上二つは崎の中に加算してゐる。

尙外に幸ノ元(東)道祖ノ元(小)道才(井)など、この部でないかと思ふが明斷出來るまで除外して置く。併し地形はこの部を疑ふに極めて好適

である。

幸、才の外「咲」なども用ひられる場合がある。又三瀨の木佐木、杵島の喜佐木は論ずべき事もあるが、加算してゐることだけにして他項に譲る。(未完)

西班牙紀行 (三)

小牧實繁

六月一日、土曜日。大分疲れたらしい、眼を覺ますと十時十五分前である。今夜出發の準備をして置いて十時半朝食、市内を見物する。主として名高い御寺の建築などを見て廻つたのであるが、中食もホテルに歸らず市内の一料亭で済ませると云ふ勤勉振りである。

伽藍の塔に昇つて見る。そこに展開したものはそれは素晴らしい景色である。二〇三階の階段を喘ぎ上つた甲斐はあつた。市街は一眸の中

に收まり郊外の擴がりまでも手にとる様である。地中海の美しいこと。大空と同じ紺青！流石に南の海ではある。

六月の聲を聞いた精ではなく本當に暑い。一寸身體がだれる位に暑い。その暑い中を見物して行く。御寺の中へ這入ると急に涼しくて氣持よくなる。これ丈けでも多くの市内の御寺の存在の理由はある。強い日光を避けるためには家々でも色々の工夫をこらして居る。然し我々の

様な風來の者にとつて最上の安住地は御寺なんである。殊勝らしく禮拜して椅子に腰かけてゐるが實際は休みながら建築を嘆賞してゐるのである。尤もぢつと座つて手を合はせてゐると自然に敬虔な念も起つて來ることも事實ではあるが。

四時半裁判所(Palacio de Justicia)(Audiencia)を訪れる。中々立派な建物である。そして此所に先史博物館が附隨してゐるから難有い。下部舊石器時代の遺物がある。ムステリアン期の遺物もある。その中にジャティヴァのコヴァネグラ(Cova Negra)發見の舊石器及び舊象の齒の化石、馬の齒の化石などがある。此の遺跡は昨日午後汽車の中から眼に着いた洞窟でもあらうか、想像は全く當らぬでもなかつたことを嬉しく思ふ。その他アルガリカ期(Epoca Argarica)と稱する時代のもの、アルメリアの文化遺物(Cultura de Almeria)と稱するもの、金石併用期の遺物なども陳列せられてゐる。思ひ掛

けない掘出しものをした様な氣がした。

セラノスの門(Torres de Serranos)と稱するものやゴチク風の橋やクアルテの門(Cuarte)など言ふ古建築而も優れた古建築を見て目を肥やしたが終日の見物で流石に疲れた。

七時見物を終りホテルの前のカフェーに入り休息しながら案内書に見入る。

八時半薄暗いだけ平たいレストランで夕食を濟ませ、九時ホテルを出、九時四十分北驛(No. 110)發北行する。

六月二日、日曜日。七時車中の眠りから覺めた。地中海が窓外に見える。バルセロナに近いのであらう、集約的に耕された蔬菜園が開ける。

八時バルセロナ(Barcelona)着、八時半驛に近い町のカフェーに入り朝食、暫らく休憩する。一休みの後公園に入り自然史博物館(主として鳥類、昆蟲類、哺乳類を陳列す)及び地質博物館を訪れたが閉されてゐた。

公園を散歩してゐた二人の女學生に考古博物

館のありかを聞くと親切に案内してやると言ふ。堂々たる博物館で一寸度膽を抜かれた位である。陳列品も中々豊富で而も整頓してゐる。質から言つても歴史考古學に關する素晴らしいものが尠くない。時間の關係で餘り悠くり見られないのは残念であるが、舊石器時代に關するものは稍詳しく時間をかけて見ることにする。舊石器時代前期のものでは打製石器、哺乳動物化石が標本的に陳列せられ又たマドリッド郊外サン・イシドロ發見の舊石器も共に陳列せられてゐる。

全中期のものでは葡萄牙カサル・ド・モンテ(Casal do Monte)のムステリアン期石器、サンタンデール地方モリン洞窟(Cueva Morin)のムステリアン期遺物、全後期のものではイベリア半島オリーナシアン期の石器、リエラ洞窟(Cueva de la Riera)のソルトレアン期マダレニアン期遺物主として石器等が目につき其の他に原新石器時代と考へられるアスツリアン

期(Asturiansense)のものカプシアン期のものなども陳列せられ又たコンデ・デ・ラ・ウエガ・デル・セラ伯の寄贈品なども見られた。

博物館を出て町中の伽藍や寺院を見物する。中々立派な御寺の建築がある。これは中西氏に引ずられて見て行くんだが元來嫌ひな道でもないので色々珍しい事實を指摘せられたり等して啓發せられる所が多い。

大學を訪れる。近代ゴシック風の落着のある立派な建物である。建築の點に於いては安つばい新開地の感じを與へる日本の大學など到底も近寄れないと思つた。中央廣間にサン・イシドロの銅像がある。

一時半、大學正面のレストランで中食をする。懷中僅かに十五ペセタス(Pesetas)で心細いと限りない。然し大學前と言ふ所は元々そんな所ぢやないのか。疲れたので二時半まで休む。それから電車で目下開催中の萬國博覽會を見に行く。流石に西班牙政府やバルセロナ市民當

局等が非常な乗氣でやつてゐる丈けあつて中々振つて居り又内容も充實してゐる。殊にその主會場の西班牙古代文化に關する展覽は最も有意義だと思つた。場内外の設備などもよく整つてゐる。新道路や園泉なども立派に出來てゐる。小供の遊びに實際の小形の機關車を連結した汽車を運轉してゐるのなどは中々大袈裟であると思つた。

人出が多いので少し上せ氣味である所へ陽氣が中々暑い。いい加減に閉口して丘を下り街道の角のカフェーに入つてシトロン・プレツセーを飲みながら休む。此所も満員大入りである。

休んでも中々疲れは休まらぬ、それかと言つて何時まで居つても仕方がないことだ。懷中甚だ心細いが大奮發でタクシーを備ひ波止場に近いコロンブスの記念碑を訪れる。港に面した高い圓柱の頂上から吾等の英雄コロンブスの銅像は俯瞰してゐる。遠く海の彼方を眺めてゐるのかも知れぬ。藝術品としても中々立派なもので

ある。唯周圍は港である精もあり騒々しい所で懷古の情にふけると云ふ餘裕を與へないのが残念である。

即ち驛に歸り六時五十五分發列車でバルセロナを後にする。ぐつたりと疲れ切つた三つの身體を乗せて汽車は十時二十三分國境驛に着く。税關は極く簡單で殆んど何の面倒もない。十時五十二分國境驛發、佛蘭西領に入る。多少の心易さを感じるのも不思議である。十二時就寢。

六月三日、月曜日。六時早くも車中の夢は破れた。窓外には地中海の美しい景色が開けてゐる。そして成層岩の丘の上に城砦などが残つてゐるのに見入つて居ると六時四十五分早くも汽車はマルセーユに着く。

自分は此所で中村中西兩君の二つの路をとつて先づ巴里に歸るのに別れを告げ尙一兩日を南佛に暮すこととする。

乗替へたマントン行の汽車は七時十五分マルセーユを出發。

八時二十分ツロン驛 (Toulon) 着。多くの海軍士官達が下車するのを見た。

十時四十分カンヌ (Cannes)、十一時半ニース (Nice)、それからヴィルフランシュ (Villefranche-sur-mer) など南佛の避暑地、今や初夏の陽光の下には眩しい位な感じを興へる華かな明るい海岸の諸驛を経て一時半マントン (Menton) 驛着。ステラ・ベラ (Stella Bella) と言ふ中所の旅館に入る。季節はづれのマントンには殆んど御客なんか見當らない。ホテルもひっそり閑としてゐる。然し巴里を出て既に三週間に垂んとする着のみ着のままの洋服も大分汚れ目が見えて来た、そして疲れも可なり出て来た。獨り旅の自分には却てその方が氣樂ではある。少し暑過ぎる感はあるが裏庭の緑の樹立も萬更捨てたものではない。

汽車の煤煙を先づ洗ひ宿を出てグリマルディの洞窟を指す。町の中丈は電車を利用し終點からは徒歩で行く。

伊太利國境迄來ると税關がある。名ばかりのものかと思つたら、旅券を出せと言ふ。見せる何の用事で行くかと聞く。洞窟を見にと言ふと今日中に又歸るのかと五月蠅く聞く。疑ひが晴れると流石にこゝしてゐたが伊太利の税關には中々小癪なのが居るなと思つた。人口の過剰な精だらう。それとも外國人で洞窟でも訪れ様と言ふ位の連中は大抵は自動車で乗つけるのであつて態々國境をてく宗で超えると言ふ變り種は元來尠い精かも知れぬ。

税關丈は少しく不愉快であつたが、ぶらぶら歩いて國境を超えるのも又一興であつた。そして何と海岸の景色の長閑なことよ。青い海と白い砂濱を隔てて造られた坦々たる大道を洞窟に向ふ。

國境を超えると洞窟は直ぐだ。そして其處には先史博物館が設けられて居り、館内には主任の人も居る。案内を乞ふ同志の士であるから中々親切である。遺蹟に案内して丁寧に説明を加

へられる。深くも掘つたもので最下層は勿論基盤の礫層まで達してゐる。その發掘の過程は例の諸報告書によつて知るのみであるが所々に遺蹟の斷面を知らしめるため地層々序、遺物、而して人骨までをそのまゝに保存して理解を助けてゐるのは難有いと思つた。その發掘の大事業であつたことは僅かに想像によつて察するの外ないが保存事業の行届いてゐるのは唯々感嘆と感謝の外ない。

陳列所の方を見る。石器類、裝飾品類、動物化石などが所狭いまでに而も順序よく陳列せられてゐる。併し陳列品の豊富なために實際は目が舞ふ様な氣がする程である。一々悠くり見る。漸く見終つたので厚く謝し、繪端書や案内書などを求め、尙一度洞窟の方を見直し去るに臨んで尙念のため他の諸洞窟の所在をも教へて貰ふ。場所だけは海岸からでも手にとる様によく見える。

何時又遭へるか知らぬ親切な管理主任にさよ

ならを告げ最後の握手を交はし海岸を散歩しながら徒歩六時半宿に歸る。

顔を洗つて七時夕食の卓に就く。宿は中流所であるが食堂は中々氣持よくしつらつてある。食後端書など書き裏庭から海岸に出て汀傳ひに九時半まで散歩し、歸つて又手紙を書き十時半就寝。

六月四日、火曜日。七時半起床、八時朝食、八時十五分宿を出で八時二十六分マントン驛發モナコに引かへす。自分の目的は遊覽でも博奕でもないのであるがモナコ行と言へば義務的に汽車は一等に乗らなければならぬと云ふから振つてゐる。近來三等か二等にしか乗らない自分には少々乗心地が善くない。九時十分前モナコ驛(Monaco)に着く。

野菜花卉の市場を素通して先史人類學博物館を指す。然しこれは追て悠くり見ることにして先づ御寺を訪れる。新らしい建築であるが悪くはなう。サン・マルタン(Saint Martin)の公園

を散歩する。美しい南國の花が咲き競つてゐる。爛漫たる樂園の感がある。

その樂園の眞只中にモナコ王創建の海洋博物館がある。これはその陳列品の豊富と設備の完全とに於いて世界に冠絶してゐる。鯨撃の大砲など言ふものを恥かしい話してあるが自分は此處で初めて見たのである。研究所の方は一般遊覽者には見せぬ。水族館も附屬してゐるが一般人は寧ろこれを楽しんで見てゐる。私は寧ろ水産製造品の陳列を珍らしく多大の興味を以て見た。崖の上の草花など摘んで去る。

十一時半先史人類學博物館横の小さいが氣持のよい料亭で中食し休息しながら日記など書き二時から悠々博物館を見る。

二階にはブランヌの洞窟(Grotte du Prince)發掘の動物化石(哺乳類、鳥類、魚類、貝類等)石器、骨角器等、小兒洞(Grotte des Enfants)發見品、カヴィヨン(Cavillon)發見品等が陳列せられ殊に小兒洞 B 層發見の老年女性人骨

(一・五五米)、全 E 層發見の男性人骨(クロマニオン人骨)、全 I 層發見老年女性人骨及壯年男性人骨等が目を引く。

地階には新石器時代モナコ住民の頭蓋骨、石器、全羅馬時代遺物等が數多く陳列せられ之れは餘り自分の興味を引かぬのであるがオブセルヴァトアール洞(Grotte de l'Observatoire)發見の遺物は大いに興味がある。哺乳類鳥類貝類等の化石、シェレアン、ムステイエリアン、オーリナシアン期の石器、骨角等がその主なるものである。中に鹿の犬齒の穿孔せられたものがある。裝飾用のものである。その他サン・マルタン洞の動物化石、打製石器等も又興味を引く。

五時丁度に見終り出でて徒歩、王宮、政府諸官署、中學等を見、狭い舊市街を好奇心で通り抜け繪端書等の土産物を買ひ坂道を降りて驛に歸り手紙など書きながら休息する。

六時三十五分モナコ驛發マルセーユを指す。

乗合はせた佛蘭西人老夫婦と話し出す。僕が日本の文學士だと言ふと不審相な顔をして居る。道理で僕は未だ十七八才にしか見えぬと言ふ。日本人の年恰好が解らないのらしい。自分達はマルセーユ人であるがマルセーユは人氣が悪いからと親切に注意して呉れる。同室のアルメニア婦人のミラノから乗りマルセーユ經由アビシニアへ行くんだと言ふ中年の餘り美しくもないのが何だか變な色目を使つてゐる。いやらしいので十一時十八分マルセーユ驛に着くと急ぎタクシーを飛ばせてスフランディドと言ふ上流のホテルに入り十二時疲れてぐつたりと寢に就く。

六月五日、水曜日。約束の如くギャルソンは五時に起して呉れた。急ぎ支度をして朝食はとらないで五時半宿の乗合自動車で驛に送られ六時マルセーユ發巴里を指す。

朝食を列車食堂にとる。流石に幹線である精か立派な人品の人達が澤山乗つてゐる。殊に二

人の上品な男の子を伴れた細形の一紳士は確かにボン・ファミーユの出らしく思はれた。そんな香りがする。やゝ贅澤な朝食も睡眠不足のため餘り美味しくは食べられないが窓外の景色は中々よい。七時四十五分アヴィニオン (Avignon) 着の前、東方遙かにアルプスの山々の遠景が認められその前面に極めて平坦な低い段丘が認められた。大河を渡る。防風林が鐵道沿線に發達してゐるのを見る。耕作景としては小麦、葡萄、果樹が栽培せられ又灌漑による牧場の開けた所があり町の近くでは例によつて蔬菜園が認められる。

九時四十分ヴァランス (Valence) 着。その邊では西の方中央高原の末端下をローンの大河が蜿々と流れるのが認められる。

十一時十五分リヨン驛着。疲れてゐるので途中下車の勇氣もない。唯車窓から美しい都會だなどと思つて見るばかりである。

ヴィルフランシュ (Villefranche-sur-Saône) の

邊には牧場に多くの牛が遊んでゐる。マコン (Macon) の驛は可なり大きく立派である。窓外の景は平凡ではあるが非常に美しい。作物としては蔬菜、葡萄、小麦が認められ牧場が開け、果樹としては櫻んぼが多い。

ヴィルヌーヴ (Villeneuve-sur-Yonne) の邊は土地は非常に平坦であるが景色は矢張り美しい。谷は廣くそこを又運河が走つてゐる。地質は一帶に石灰岩で何處も牧場が多い。そして人

家が非常に多くなる。もう巴里にも近いのである。

七時十分汽車は巴里リヨン驛に着く。暫らくの旅ではあつたが此の頃第二の郷里とも考へてゐる心安さの此の都に歸つては流石になつかしさの情を禁じ得ない。タクシーを備つて急ぎ下宿に歸り八時久し振りの支那料理に舌鼓みを打つ。(昭和七年三月二十二日)

伊太利ところぐ (三〇)

瀧川規一

〔フロレンスとラファエル〕 牛津大學の陳列館にラファエルが十五六歳頃であると思へる畫像がある。筆者はチモテオ・ヰイチ (Timoteo Viti) である。少年ラファエルは鬚の毛を長くのびし帽子を冠り溫和にして惻愾な容貌をして

ゐる。父はウルビノ (Urbino) 市の貴族に仕へてゐた畫家兼詩人であつた。ラファエルは八歳の時母を失ひ十一歳の時父を失つて伯父の家にひきとられて當時ウルビノで有名であつた青年畫伯ヰイチの許に弟子入りをなした。ラファエ